

米国におけるラグビーの台頭：ソーシャルメディアの新興スポーツに対する 影響（後編）ⁱ

Rugby's Rise in the United States : The Impact of Social Media on An Emerging Sport (Part 2)

ベンジャミン・ジェイムズ・コッカー¹⁾ 訳 大西 好宣²⁾

Benjamin James Kocher ONISHI Yoshinobu

要 約（前編と同じ）

本研究ではグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて、米国のラグビー選手に対してメディアが持つ影響を質的に調査した。また本研究は、米国で生まれ育ち、ラグビー強豪大学でプレーする選手への詳細なインタビューを含んでいる。当該インタビューは、選手がラグビーというスポーツを新たに始める際、伝統的メディア及びソーシャルメディアがどのような役割を果たしたのかを確認するための一助として行ったものである。結果として明らかになったのは、新たな米国人ラグビー選手を誕生させたという点において、伝統的なメディアが果たした役割はそれほどでもなく、むしろより新しいソーシャルメディアが果たした役割の方が大きいということである。また、友人や家族といった対人コミュニケーションを通じて、新たなラグビー選手は誕生する。そして一旦ラグビーを始めれば、日々の生活の中でより一層ラグビーが重要になってくるという点においてもメディアは有益であり、選手の勧誘活動はソーシャルメディアによって強化される。他にも、同僚選手との絆や友情が強固であるほど、その選手はラグビーを続ける傾向が高いという結果が得られた。

キーワード：米国、ラグビー、ソーシャルメディア、伝統的メディア、社会的交流、兄弟のような関係

key words : USA, Rugby, Social media, Traditional media, Social interaction, Brotherhood

第四章：結果

ラグビー選手にインタビューして得られたデータは、人々が何故ラグビーをプレーすることを選んだのか、そしてそれを止めることなくずっと継続しているのかについて説明する手助けとなる。結果は三つに分けられる。最初は第一の調査項目に関する回答であり、二番目は第二の調査項目に関するそれである。三番目は補足であり、必ずしも第一、第二の調査項目と関係があるものではないものの、有益と思える情

報を提供してくれるデータである。インタビューしたラグビー選手の名前は全て仮名となっている。次の表は選手、チーム、スカウトが各メディアをどのように利用しているかを示しており、本稿ではこれ以降も言及する。

1) 米ブリガム・ヤング大学 2) 千葉大学

表1 わかったこと

ラグビーをプレーする理由	選手	チーム	スカウト
伝統的メディア	<ul style="list-style-type: none"> ・プレー開始決定には利用最小限 ・米国では機会が限られる 		<ul style="list-style-type: none"> ・大学ラグビー選手権 ・大学カップ
ソーシャルメディア	<ul style="list-style-type: none"> ・プレー開始後は使用頻度高い ・プレー改善の欲求高まる ・楽しみとして 	<ul style="list-style-type: none"> ・試合の広報 ・チーム認知度向上 ・選手の勧誘 	<ul style="list-style-type: none"> ・効果的 ・最初の関心と呼ぶ ・YouTube (動画や中継)
人対人	<ul style="list-style-type: none"> ・フィジカル ・精神性 ・達成感 ・チームワーク ・リーダーシップ 		

インタビューの結果、選手たちは似通った回答を示した。多くの選手が、誰に吹き込まれたわけでもないのに、ラグビーの持つ社会的な側面について語り、そのことがラグビーに関係する時間だけでなく、選手個人の人生においても重要な部分となっていると話す。ラグビーをプレーし始める前後のメディアの使い方に関して、彼らの回答は内容的に似通っていた。インタビューをした選手たちは、米国の西海岸から東海岸まで幅広いことを考えると、ラグビー文化が全米レベルでの類似性を有していることがわかる。

調査項目1：米国人アスリートは何故、より人気のある他競技でなくラグビーをプレーすることを選ぶのでしょうか？

本研究における最初の調査項目は、米国人アスリートは何故、より人気のある他競技でなくラグビーをプレーすることを選ぶのかというものである。この質問への回答として、インタ

ビューの結果話された内容は単純ではない。第一の調査項目への回答として、次のような情報が有益であろう。

メディアを通してのラグビーへの興味

実施されたインタビューで得られた全般的、一般的な共通意見は、アスリートがラグビーをプレーすることを決断するのに、メディアは最小限の役割を果たしたに過ぎないというものである。米国人アスリートにメディアが大きな影響を与えられない理由の一つは、テレビのような伝統的メディアがラグビーを扱うことが少ないからかもしれない。しかしながら、留意すべき幾つかの例外がある。ラグビーをプレーする以前に、少なくとも多少はメディアに影響されていたという選手の場合、そうした影響がまだ未体験のスポーツであるラグビーへの興味を高めることにも繋がったようだ、と話しているのである。それによって彼らはより行動的になり、自分でラグビーをプレーするようになったというのだ。

フレッドという選手は、ラグビーを選ぶ前にニュージーランドのオールブラックスがプレーするDVDを見たと話す。オールブラックスはニュージーランドという小さな国の代表チームであり、おそらく全ての国代表の中で最良、そして最も成功したスポーツチームである(espnscrum.com, 2013)。フレッドは言う。オールブラックスのようなプロによる試合を見て、ラグビーと恋に落ちたのだと。自身が選手となってプレーし始めた時、自分がどのような役割を果たせばよいかをより理解するための手助けにもなったと。

ロジャーというもう一人の選手は、ラグビーファンの友人と共に育ち、その友人宅でラグビーの試合をよく一緒に見たものだという。彼が覚えているのは、二人で頻りにインターネットの動画サイトであるYouTubeを見て、強烈な当たりやタックルのハイライトシーンに接したことだ。彼によれば、こうした動画を見たことがラグビーをプレーするという決断に繋がったという。

抜粋 1 :

この競技がどれほどフィジカルか、友人宅で動画を見ただけで凄く憧れたんだ。だから自分も同じように出来たらとても格好いいだろうなと思ったんだ。

ロジャーもその友人も、四六時中ラグビーの動画を見ていたわけでは決してなく、むしろ「ちらほら」という程度だったが、それでもそうした動画は、ラグビーこそ自分がプレーしてみたいスポーツだと気付かせてくれたとロジャーは言う。ラグビーをプレーする前にそうした動画を見たことで、彼は大きな憧れを抱き、当該競技に対する多少の予備知識を蓄えることが出来たのだ。ラグビーが持つフィジカルな特性への憧れによって、ロジャーは自らそれをプレーしてみようと考え始める。

ラグビーという競技に新たな一歩を踏み出す前に、多少の励ましが必要な人もいる。他の人の話を聞いてこの競技に関心を持ち（後段でさらに深く掘り下げる）、実際にプレーする前にメディアを使ってラグビーの知識を増やす、ということも可能である。

マイケルの場合、ラグビーとの最初の出会いは高校に入学した時だった。その日、彼の高校ではスポーツフェアが開催されており、ラグビー部のコーチがマイケルを呼び止めたのである。

マイケルは言う。選手としてスカウトされた時にはメディアも使ったけれど、自分がラグビーをやってみようと思った要因は、やはりコーチとの人的な交流だったと。コーチとの出会いの後、マイケルはインターネットでラグビーについて調べた。

コーチは彼に競技への関心を持たせたという点で重要である。この出会いの後、マイケルは「メディアで色々（知ったけど）、でもやはり一番は（コーチ）かな」と言う。

社会的交流を通じたラグビーへの関心

人々がスポーツに関心を持つ（そしてそれをプレーし始める）もう一つのルートは、他者の助力によるものである。実際、アスリートと他者との意思疎通が図られるようになると、そう

した対人関係はアスリートが競技を始める意思決定に大きな役割を果たすことになる。メディアがそれなりの役割を果たすのはそれ以前の話に過ぎない。

インタビューしたラグビー選手たちの中で、ラグビーをプレーすることを選ぶ前に少しでもメディアを利用したと答えた者はわずか3人のみであった。残る全員が、ラグビーをプレーすることを決めるのに、メディアは関係なかった、むしろ他者との社会的な交流こそが競技選択の要因になったと回答した。

メディアを触媒として利用したと回答した者さえ、他者との社会的交流がラグビーをプレーしようという決断を後押ししてくれたと明らかにしている。例えばフレッド（既述）は、YouTubeでプロのラグビーを見たり、ハイライトを見たりしたメディア体験を持つ。しかり彼もまた、中学生の頃、高校生の兄がラグビーを始めたので全試合応援に行き、そこで初めてラグビーと出会ったのである。高校入学後、フレッドもラグビーを始める。フレッドによれば、「それがラグビーをプレー出来る最初の機会だったから」だ。

ロジャーもラグビーをプレーする以前にメディアの影響を受けた一人だが、高校時代には多くの友人がラグビー選手だった。YouTubeでロジャーにラグビーのハイライト動画を見せてくれたそうしたラグビー選手の友人たちがもしなければ、ラグビーを始めようという決心はなかなかつかないだろう。繰り返すが、ラグビーという競技の選択にメディアは手助けとなったとロジャーは言う。けれど彼はこうも言う。メディアを通じてラグビーを紹介してくれたのは友人たちなのだ。

こうした多くの人たちがラグビーを始めたのは、結局のところ何が要因なのだろう。それを明らかにする上で、友人や家族はホットなトピックのようだ。

全てではないにしろ、インタビューをした多くの選手にとって、メディアは大して重要な要因ではなかった。メディアが助けになったと語った者もいたけれど、残りは皆、ラグビーを実際にプレーするようになった後で初めてメディアの影響を受けたと述べている。このよう

な米国人がラグビーを始めた理由を理解するためには、例えば、他の選手たちがどこでラグビーへの関心を持ったのかを見てみることに役立つ可能性がある。

ロバートはこれまでに登場した選手たちとは異なる。彼がラグビーに関心を持ったのは、メディアを通じてではなく、競技を経験したことのある友人や家族を通じてだ。彼にとって、メディアは何の接点もない。

ジョニーがラグビーを始めようとしたのは、兄たちが皆プレーしていたからだった。シドもまた似たような経験から、ラグビーに関心を抱いた。彼によると、父がラグビー選手だったため、子供の頃からその父がプレーするのを見ており、やがて彼自身が若者向けのリーグでプレーし始めたという。

つまり、シドがラグビーに関心を向ける手助けとなったのは彼の父である。シドはラグビーをプレーし始めてから、それをずっと続けて行こうと決めた。彼はまたこうも言う。父のチームメイトたちが若者チームのコーチだったので、自分は彼らともよく話をしたものだ。彼はそんな風にラグビーと出会い、関係を深めて行った。

同じように、マーティンはラグビーを始めたことに関して、中学校の体育教師にある程度感謝している。この教師は、マーティンがラグビー部のある高校へ進学することを知ってすぐ、見学してみるようにと彼に勧めてくれた。マーティンには中学時代、ラグビー選手の友人も数人いたので、比較的早い年頃からこの競技を知っていた。それだけでなく、マーティンによれば高校の友人たちにもラグビー選手がおり、ラグビーをやろう、クラブに入れよと始終口うるさく勧めてくれたのだとか。彼は言う。「正直、僕をラグビーへと導いてくれたのは友人たちなんだよ」。

マーティンは続けて、彼自身も他者に影響を与え、ラグビーを始めさせたと言う。彼が語った具体的な方法の一つはごく単純で、2年間、一人の友人にとにかく声をかけ続けたこと。マーティンはその友人の説得についに成功し、彼はラグビーをプレーするようになった。マーティンによれば、「あいつ、最高に楽しんでるよ」

とのことだ。

マーティンのこの方法は、ジュリアンにラグビーを始めさせたという点でも効果があった。ジュリアンがラグビーを始めたのは高校一年生の時。同じスクールバスに乗る友人たちとの社会的交流がきっかけだった。彼によると、上級生でラグビーをプレーしている者がおり、冗談ではあったが、練習を見に来ないとただじゃすまないぞとジュリアンを脅したのだという。

登校初日、ジュリアンは「ラグビーをとてめ気に入りたい、やってみたい、どうやってプレーするか知りたいと思った」。以来、彼はずっとラグビー選手であり、今も大学のクラブでプレーしている。

最後にインタビューしたマテューは、父親が大学時代にラグビーをプレーしていたため、自分もラグビーを始めたのだと語る。父がラグビーを勧めたので、自分自身もやってみることにしたというわけだ。

彼はまたこうも言う。彼の住んでいたのは、他の多くの町に比べて古い町で、ラグビーのコーチもたくさんいたのだ。彼らは試合中心の考え方を持っており、マテューによれば、「実際、彼らコーチのラグビーへの関心が、僕にラグビーを続けさせてくれたんだ」という。

ラグビーと対人関係

メディアは新たなラグビー選手を生み出し、彼らのプレーする欲望を掻き立てる点でも役割を果たして来た。けれどもそれだけではない。実際、ラグビーを衆目に晒すためにメディアが果たした役割など、他者との触れ合いによるそれに比べれば遥かに小さい。そうした対人関係に含まれるのは、両親、兄弟姉妹、友人、コーチ、それに加えソーシャルメディアのような意思疎通の媒介手段といったところだろう。

ロバートは、自分がラグビーを始めたことに関する限り、メディアが果たした役割はそう大きくないと考えている。それよりも、ラグビーをプレーしたいという気持ちが芽生えたのは、自分の兄や友人の兄たちが原因だという。

けれども、一旦始めてみると、ラグビーには単なるスポーツ以上のものがあり、ロバートが

共にプレーした仲間たちとは、彼にとって何やら兄弟のような関係になって行った。この兄弟のような関係というテーマは、特に催促したわけでもないのに、続く数名へのインタビューでも聞かれた。選手としてだけでなく、兄弟としても、ロバートはチームメイトをととても近い存在だと感じていた。

抜粋 2 :

友達もみんなラグビー選手だからね。競争してるというよりは仲良しというか。つまり、明らかにお互い凄く競争してるんだけど、もう僕にとってはあいつらみんな兄弟みたいなものなんだよ。あいつらこそ僕の世界そのものさ。

こうした考えや感情は、今回全てのインタビューを通じて何度も聞かれたテーマである。フレッドも同じだった。兄が高校のラグビーチームにいたので、フレッドも高校に入学して同じチームに入ったのだ。若い選手が新しいスポーツに挑戦しようとする時、その家族が彼らに与える影響をここにもまた垣間見ることが出来る。

けれど、フレッドがラグビーをプレーし続けたのはそれだけが理由ではない。ロバートのように、フレッドも仲間との距離が近くなって行ったのだ。

抜粋 3 :

チームとの社会的交流はとても大事だよ。一緒にプレーしていると、基本的に、最後は兄弟みたいになるからね。仲間が後ろで守ってくれたり、逆にこっちが仲間の後ろで守ったり。グラウンドでも、そこを離れてもね。それをわからないと。チームメイトとそうした関係になるのは、だから物凄く大事なんだ。

ジョニーもまた、高校時代にラグビー選手だった兄を通じてこの競技を知った。単なるチーム以上の何か、という点でジョニーは次のように言う。同じチームにいて、多くの課題や練習を共にこなしたことで、ジョニーはチームメイトと本当に近い存在になったのだと。ジョニーによれば、こうした社会的交流が基礎と

なって、彼はチームに留まり、グラウンドで変わらずラグビーをプレーし続けたという。繰り返すが、ジョニーは自分のチームを単なるチーム以上のものだと感じていた。実際、「君だって絶対に、その一員として兄弟みたいになれるよ」と彼は語る。

友情という要因について、今回インタビューをした選手たちの間ではよく聞いた気がする。単なる友達ではなく、同じチームなんだという、人生に影響するようなもっと深い関係だ。

ロジャーは友人たちの熱意によってラグビーをプレーし始めた。彼は言う。あいつらがいないければ、ラグビーをプレーすることなんてなかったと。またこうも信じている。自分やチームメイトがラグビーをプレーし続けた最も大きな理由の一つは、お互いがチームで育んだ友情だと。

抜粋 4 :

一緒にプレーした仲間は親友さ。そのうちの何人かとは今も（同じ大学の）チームでプレーしてる。米国代表チームでも二、三度。だから思うんだけど、ラグビーを止めずにプレーし続けようって決めるのも、友達次第ってところはあるよ。

重要な人間関係がいつも同じチームの仲間たちから派生するとは限らない。もちろん、選手と所属チームとの関係は最も重要ではあるものの、自チーム外で生じた関係が後々重要になって来ることもある。ロジャーは自チームとの関係が大事だと感じているが、決してそれだけではない。他チームと一緒にプレーした仲間や敵として戦ったチームさえ、時として遠距離をものともせずにも継続する、重要な絆を形成することがあるとも感じている。

抜粋 5 :

つまりそれは、ラグビーというコミュニティ内での家族とか、兄弟みたいなものなんだよ。だから、どのチームでプレーしてるかなんてのは問題じゃない。カリフォルニア大学バークレー校か、アリゾナ大学か、そんなのはどっちでもいいんだ。だってそもそも、旅行ならどこ

にだって行けるでしょ。それって凄いことだよ。自分のチームだって敵のチームだって、選手の3人か4人は知ってるでしょ。まあ、もっとたくさんでもいいけど。

皆で試合をするには、選手全員が同じ場所において、同じ時間を共有することが要求される。グラウンドでは選手一人一人がやるべきことをやり、チームが一体となれば、個々の選手にも強さが生まれる。こうしたことこそ、ラグビーにおける社会的交流が堅固で重要になる一つの理由である。

チームメイトを何故それほど近くに感じるのだろう。そのことについて、シドはヒントを与えてくれる。彼によれば、チームメイトがお互いを近く感じる理由は、共に経験して来たことの全てだという。

抜粋6：

ラグビーを通じて強い絆が生まれるのは、一緒にプレーしている仲間と逆境を乗り越えて来たからじゃないかな。すぐそこにいる奴とまる3年、一緒にプレーしていればお互いを熟知するようになって、凄く強い絆が生まれるよ。それって一般的に言って、普通よりも強い関係だよ。

ラグビーを実際にプレーすることは、友情を深め、選手同士の距離を近くする。共に困難に直面することは、選手同士お互いに意思疎通を図る機会を与える。彼らは成功を目指し、そうした障害を取り除くために共に努力するのだ。

ラグビーにおける兄弟のような関係について、さらに証言してくれたのはマーティンである。彼の考えによると、人々が最初にラグビーを始めるのは、例えば試合の名声など、何か他の理由かもしれないという。けれど、そうした人たちをチームに留まらせるのは、人であるとマーティンは信じている。

抜粋7：

最後まで同じチームで一緒にいた奴らってさ、死ぬまで兄弟みたいなものなんだよ、絶対。夏休みに帰省して来ると、高校時代のラグビー仲

間といつだって遊べるもん。ここじゃあ実際、あいつら兄弟みたいなものなんだよ。

マーティンは続けてこうも言う。「兄弟のような仲間には実際、大いに助けられた」。そして、彼のチームメイトは「プレーを続けることが出来た最も主要な要因だ」と。共にプレーすることで生まれる絆は、チームの結束を固くする。それが重要なのはチームの成功のためだけではない。個々の選手がラグビーをプレーし続けたいと思わせる意味でも、絆は重要なのだ。

ラグビーチームにおける絆が何故強いのかということについて、ジュリアンは次のようなより突っ込んだ表現をした。

抜粋8：

練習でも試合でも、グラウンドで経験することって何でも、つまり、一つ一つの当たりってそれぞれ戦闘でしょ。選手の本当の姿が露わになるような戦い。相手も全力でぶつかって来るわけだから。自然と、人としてお互い引きつけられるよね。僕はそう感じる。

マイケルもマテューも、同じチームの仲間たちとの社会的交流があったから、上手くなるうとも思ったし、プレーも続けたと言っている。行ったインタビュー結果が全て示しているように、他者との社会的交流は、人がスポーツを続けるための鍵となる部分であるようだ。こうしたラグビー選手にとって、ラグビーはただの試合ではなく兄弟関係なのだ。

そうすると、調査項目1への回答は、他者との社会的交流の中にあるに違いない。インタビュー結果が示しているのは、人対人の交流こそが米国人アスリートをしてラグビー、つまりメディア市場にまだ大規模参入出来ないでいるスポーツを選択させたのだということである。どの場合でも、彼らアスリートが当時よく知りもしなかったラグビーという新しい競技を始めさせたきっかけは、周囲の人々によってもたらされた。他者との社会的交流がなければ、ラグビーの発展スピードは現在よりもっと遅かったと言っても差し支えあるまい。

人を仲介する

友人や家族との面と向かった意思疎通は、ラグビーに人を呼び込むには効果的だが、時にそうした生身のやりとりは別のプラットフォーム、すなわちFacebookやTwitterのようなソーシャルネットワークにも拡大して行く必要がある。マテューはインタビューの中で、メディアを使ったラグビーの広報をどれだけ頑張っていたか説明してくれた。それに加えて彼は、人々にFacebookやTwitterのアドレスを教えたことが自チームの試合を広報するのに効果的だったとも語ってくれた。

Facebookにラグビーの動画を単に投稿しただけで、「たくさんの人が興味津々で見てくれた」ことをマイケルは発見した。そして彼らは皆マイケルに、それらの動画が「凄く格好良い」と言ってくれたという。マイケルはまた、今やラグビーはメディアで、特にFacebookでたくさん目にするようになったとも気付いている。

Facebookのようなソーシャルネットワークの登場により、ラグビー情報はインターネット上を着実に行き交うようになった。シドは週一回以上、ラグビーの情報や動画を熱心に検索することはない。それでも彼は、毎日ラグビー情報を目にすると言う。それは、Facebookが彼のために全ての仕事を代行してくれるからだ。シドがフォローしているグループは日々ラグビー情報をアップロードしており、おかげで彼も自分のアカウントでそれらを簡単に共有することが出来る。

FacebookやTwitter、その他のソーシャルメディアは、チームにとっても試合を広報し、観客数を増やすことを容易にした。インタビューした多くの選手たちが、FacebookやTwitterをどのように使ってホームの試合について広報したかを語ってくれた。そうした広報の甲斐あって、試合の観客数が増えるのを目の当たりにしたというのだ。

ソーシャルメディアは選手個人やプレーを研究している人たちによく利用されており、チーム総体としてもソーシャルメディアの領域に分け入って来ている。インタビューによれば、ソーシャルメディアは試合の広報や認知度向上のた

めばかりではなく、選手のスカウトにも用いられている（表1参照）。

プレーする他の理由

インタビューを分析するとわかるのだが、メディアが提供する最小限の情報や、社会的な側面といったこと以外にも、選手がラグビーをプレーする理由はある。ラグビーを始めた理由、それを続けている理由として、他の様々な要因がインタビューした選手から紹介されている。多く聞かれたものの一つは、試合中プレーが止まらないことだ⁹。守備と攻撃は目まぐるしく変わるが、動きは継続している。ラグビーがフィジカルなスポーツであることも、彼ら選手たちがラグビーに恋をした大きな理由の一つだ。

個人的な達成感を、ラグビーの試合が楽しい理由として挙げる者もいた。彼らは自分が満足だと感じるまで、ハードワークに精を出し、努力を傾注する。そしてそのことによって、彼らはまたさらなる成長を目指し自らを追い込むのだ。ジョニーはラグビーの試合が大好きな理由として、自分を追い込むことを挙げる。

抜粋9：

グラウンドにいる時は、いついかなる時も自分との競争。僕はそれを楽しんでるんだ。80分、出来るだけ激しく自分を追い込む。そんな風に激しく出来てる時、そうでもない時、それって自分でわかるよね。そういう挑戦が自分でも本当にわくわくする。だから僕は毎週土曜、グラウンドにいることが大好きだし、そうやって自分を試してるんだ。

自分を追い込む方法は、何もフィジカルに限ったものばかりではない。精神的に自分を追い込むこともプレーに関係して来るし、それが楽しいと感じる人だっている。マーディンもラグビーは自分を試すにはうってつけの方法だと思っている。フィジカルな意味だけでなく、精神的な意味でもだ。

抜粋10：

僕はスクラムハーフだから、グラウンドに出

ると色んなことを考え出す。足で掻き回してやろうとか、体を張るぞとか、敵の考えを上回ってやろうとか。そんなダイナミックさ全てが、僕にとっては凄く楽しい。

選手が自らを追い込めば、活躍の機会も増え始めるだろう。そうすれば、達成感も得られる。だから、多くの選手にとって大事なものは、もちろんラグビーで活躍するということだ。けれども、活躍することと同じくらい大切なことは、チームを破滅に導くような選手にならないということだ。

フレッドは活躍したいと望んでいるが、彼にとってはそれ以上に大事なものがある。それは、得点に結びつくミスをしなないということである。

抜粋 11 :

まあ、活躍したいとは思いますが、それ以上にさ、失敗しないことっていうか、チームメイトを失望させたくないっていうか。だから、相手チームに点を入れられて、ゴールポストの下で突っ立ってる時の気持ちより最悪なことってないよね。特に、それが自分のミスだったりしたらさ。

チームでプレーするという事は、全ての選手がその役割を果たすことを要求する。そして、一人でもそれが出来なければ、チーム全体が一敗地にまみえる。チームワークという要因も選手にとっては大事になって来ている。

ラグビーにおけるチームという側面について語ってくれたのは、再びシドだ。

抜粋 12 :

チームメイトがいなければ何者にもなれない。1 チーム 15 人のスポーツでは、全員が大事なんだ。米式蹴球ならクォーターバックがグラウンドではチームを率いるし、バスケットボールなら花形選手が一人いればプレーオフまで進めるでしょ。ラグビーの面白さっていうのは、傑出した選手が一人いたからって、試合に勝つとは限らない、チャンピオンシップまで進めるとは限らないってことなんだ。皆が一緒になってそ

の力を結集しないと、相手を凌駕して勝つなんてことは出来ないんだよね。

インタビューした選手の多く（全てではないにしても）にとって、チームプレーは大きな意味を持っていた。ある選手など、ラグビーが何故自分にとって大事なのか、その理由を考えた時、より意味深調な答えが浮かび上がって来るという。もちろん、努力することや、勝利のためのゲームマネジメントも大事ではあるものの、ジュリアンにとって、ラグビーとはグラウンド上で単に結果を出すこと以上のものだと感じられるのである。

抜粋 13 :

僕は今主将なので、男ばかりの集団を率いて行くために頑張ってる。それって大学ⁱⁱⁱを卒業したら、士官としてやる仕事と直接関係してるんだよね。エアコンの効いた部屋から華氏 15 度（摂氏マイナス 9 度）の屋外に出て、共通の目標を達成するために男ばかりの集団を率いていかななくちゃならないんだから。

ラグビーをプレーしていて良かった。そう感じる方法は選手によって違う。チーム一体となって試合に勝った、死活的なミスをせずに済んだ、或いはグラウンドを離れ、人生で成功するためのスキルを学んだなど、選手たちは自分が試合や練習で行ったことから、ある種の楽しさや達成感を発見している。

インタビューした選手たちが、ラグビーを始めた理由は千差万別である。その意思決定には社会的交流が主として重要で、メディアがそれを補足しているようだ。けれども一旦ラグビーを始めれば、それを続けるに当たっては、より広範な理由が存在する。繰り返しになるが、チームメイトとの社会的交流はそうした理由の重要な一部である。

調査項目 2 : ラグビーを選んだ意思決定に、メディアはどのような役割を果たしているのでしょうか？

米国人ラグビー選手がなぜ当該競技を始めたのかということをもっと理解しようとするうち、そうした意思決定にメディアが大きな役割を果たしているのではなかろうかという考えが頭をもたげて来た。インタビューを通じ、選手たちの現在の生活にはメディアが一定の役割を果たしていることが明らかとなって来たものの、彼らが初めてこのスポーツを知った初期段階では、メディアの役割はそれほど大きくなかったことも確実にあった。

先に述べた通り、意思決定にメディアが最前線の役割を果たした事例も少数存在したものの、実際にはアスリートたちにラグビーをプレーさせるほどの決定的要因としては、メディアの役割は大きくないことがすぐにわかった。それにも関わらず、他者を勧誘するためにソーシャルメディアを利用するという事例は増え続けているのである。

意思決定に影響するメディア

調査項目 2、すなわち選手がラグビーを始める際にメディアが触媒として機能したかという問いに答えるに当たっては、伝統的メディアによる実際の意思決定過程における役割は大きくなかったということをもっと記憶しておかねばならない。米国人にラグビーへの関心を持たせ、それをプレーさせようとする時、伝統的メディアは殆ど用いられなかったようである。個人的に調べたりしない限り、米国のメディアでは比較的ラグビーの情報が見つけにくいからであろう。

インタビューした選手の多くは、ラグビーを始めるまで全く知識がなかったという。先に触れたように、彼らは主として友人や家族のおかげでラグビーをプレーし始めたと言っている。当時、彼らは当該競技のことを何も知らず、プレーし始めた段階ではかなり準備不足の面があった。例えばロバートは、最初の試合の時ですらこの競技のことを全く理解していなかった。実際、彼はラグビーの試合など自分が始めるまで見たことがなく、「どのようなものかさえわからなかった」と言う。

自分でラグビーを始めるまで、どのようなメ

ディアでもラグビーを見たことがないという選手が、今回インタビューした中では大多数で、何人もが同様のことを繰り返し話してくれた。但し、プレーする前に DVD でニュージーランドの国際試合を見たことがあるというフレッドという選手のインタビュー事例が一つある。またもう一例、ロジャーの場合には友人の家でよくラグビーの試合を見ており、メディアが少しは安心を与えてくれていた。それ以外には、インタビューした中でラグビーをプレーすると決める前にメディアでラグビーを見たことがあると答えた者は皆無である。

インタビューした選手たちがラグビーをプレーすると決めた際、メディアは殆ど関係なかったものの、メディアの中のラグビー情報を利用するケースは依然増えている。マーティンはインタビューの中で、彼がチームのスカウトをしていることを教えてくれた。そして、実際にチームがどのようなスカウト活動をしているか、またラグビーをどのように広報しているかについても教えてくれた。

彼によれば、学内でブースやテーブルを設けて新人の勧誘をしている時に、YouTube に掲載されているチームの試合や他の試合のハイライト動画を流して見てもらっているという。ラグビー部に入ってくれそうな学生には、チームの Facebook や Twitter のプロフィールを見るように勧めてもいる。

表 1 (既述) に示されているように、マーティンはこうした戦略が有効だと信じている。特に YouTube の短い動画は、実際のラグビーのプレーとはどのようなものか、グラウンドではどんなことをするのか、新入生に見て貰える。ただ話しただけではわからないようなことも映像で示すことが出来るのである。

マーティンは、NBC^{iv}によって米国中に放送されている大学ラグビー選手権 (表 1 参照) を通じてラグビーに関心を持つ新入生が増えているとも感じている。米国のラグビーに関しては、大学ラグビー選手権こそが最もよく見られているイベントであると彼は感じている。このイベントを通して、益々多くの学生がマーティンのところに来るようになり、チームに入るにはど

うしたら良いかと聞くのだ。ただテレビで見たというだけなのに。

先に(表1でも)示したように、YouTubeのようなメディアは、マイケルのようにラグビーに元々興味があったという者を、実際にプレーさせるための手助けとなっている。インタビューした選手たちが、ラグビーをプレーしようと思ったことに対してメディアは大した影響を与えなかったものの、一度ラグビーを始めれば、メディアは選手たちの生活(ラグビーが上手になりたいという欲求を増幅することも含む)にとってより重要なものとなる。

メディアにおける情報不足と重要性の低さ

ラグビーがもっとテレビで取り上げられるようになって欲しいかと尋ねたら、ロバートは明らかに興奮した口調で、絶対そう思うと声高に答えてくれた。放送が増えたら、確実にもっとラグビーを見るようになるだろうとも。

彼にとって、米国内の放送でラグビーを見つけることは至難の技である。彼の言葉を借りれば、インターネット上でちゃんとした生配信を見つけることさえなかなか達成出来ないという。米国メディアによるラグビーの扱いを表現するのに、彼が用いた単語は「ゾットする」だった。インタビューに答えた他の選手たちも、特にテレビでラグビーの動画がもっと増えて欲しいと答え、大きな関心を示した。

メディアによる米国ラグビーの扱いは増えつつあるものの、依然としてその質やこの競技に関する全般的な知識についてはまだまだである。マーティンは、少なくとも放送やアナウンサーに関する限り、情報量がとても少ないと思っている。彼によれば、試合中、解説者は目の前で起こっていること全てを説明しようとするという。

抜粋 14:

7人制トーナメントとか、試合を見る度に素人向けの放送だと感じる。だって、ノックオンとは何か、スクラムとは何か、ラインアウトとは何か、いつだって説明してるんだから。解説というよりは、試合のルールに関する説明だよ。放送関係者が最も広範なファン層にアピー

ルしようとしている理由は僕も理解してるんだけど、ルールなんてすぐにわかってちゃうから、聞いてるとちょっと退屈だよ。

ジュリアンには、スポーツ放送が才能あるラグビー選手を侮辱しているように見える。彼らは高いレベルでプレーしており、素晴らしいハイライト動画すら生み出せるのに、「ESPN^vではそんなもの見られない」からだ。メディアが扱ってくれないということは、「スポーツにとっては実に有害だ」とジュリアンは感じている。米国におけるラグビーのレベルが、米式蹴球のそれよりも遥かに劣っているように見えてしまうからである。米国のメディアによるラグビーの見せ方は、「他の国のレベルには絶対に達していないし、将来あるべき姿とも全く異なる」とマーティンは信じている。

現役選手にとってのメディアの重要性

こちらから話を振ることはなかったものの、インタビューでは大学ラグビー選手権について殆どの選手が語ってくれた。米国のラグビーにとって、この選手権がNBCの手によりどのような全米で放映されるかがとても重要だというのである。今年^vは大学カップの決勝戦もテレビ中継されたが、それについても今回インタビューした選手の多くが米国でのラグビーの発展にとって大きな一歩だと語ってくれた。もう一つ印象的なことは、大学カップはまだ始まって2年目だということである。つまり、これほど早い段階で放送が決まったということは、選手権の歴史の中で決して小さなことではない。

米国でラグビーが見られる可能性は徐々に高まっており、インタビューが進むに連れてそれは明らかとなっている。以前なら、テレビでラグビーを見るためにはサッカーかラグビーの専門チャンネルと契約するしか方法がなかった。けれども今なら、大学ラグビー選手権や大学カップ(表1参照)、さらには7人制の国際トーナメントなどが年中放送されており、よりアクセスしやすくなりつつある。ロバートによれば、メディアによるラグビーの扱いは「徐々にではあるが確実に」改善されている。

全米に中継されるイベントに出場するようなチームの一員であることは、ラグビー選手に深い感銘を与えることが出来る。ジョニーは大学ラグビー選手権にチームが招待されたことを、「荘厳な気分」という言葉で表現する。こうした高いレベルでの7人制出場機会に恵まれたことで、ジョニーは例えばNBCで時々放送されているIRBTM国際7人制シリーズのようなより多くの試合を見るようになった。

ラグビーを継続しその経験を深めることで、ジョニーはインターネットでラグビーに関する記事や試合評を検索するようになった。また、ユニバーサルスポーツ(NBCとパートナーを組む)やNBCで試合を見るようにもなった。ジョニーはまた、ESPNがそのホームページにespnsrum.comと題したセクションを設け、ラグビーに参入して来たことについても触れた。彼は自分がラグビーを始めて以来、メディアの扱いが改善されて来たことが印象深いと言う。彼は言う。「メディアがラグビーを全く扱わなかった時代から、今やその気になれば簡単に発見出来る。凄いことだよな」。

テレビだけではなく、ソーシャルメディアも含め、メディアにおけるラグビーが成長しつつあることにシドは同意する。大学ラグビー選手権はNBCテレビによる放送だけではなく、YouTubeでも生配信されており、試合が終わった後にも再配信されている。

大学ラグビー選手権はマーティンも、チームへの新人スカウト時に大事だと評価していた。チームのスカウトとして、彼は新人選手がどこからやって来るのかを知っている。そして、大学ラグビー選手権こそがこの競技へと選手たちを運んで来る重要な機会になっていると信じているのである。彼らはそれをテレビで見て、関心を抱いてやって来るのだ(表1参照)。

今回インタビューした選手たちが口にしたホームページやソーシャルメディアはそれぞれ異なっているものの、自分たちがそれらのサイトでどのようにラグビーの情報を得ているか、他の選手たちはどのような使い方をして情報を得ているかについて教えてくれた。彼らにとっての主たる情報源はどうやらYouTubeのよう

(次点はRugby Dump)、短い映像、練習用の動画、試合のハイライト、その他あらゆる類のラグビー関連動画を見ているらしい。

インタビューした選手によると、例えばrugbymag.comのようなラグビーについての記事を掲載しているサイトも見ているようだ。そうした情報源から目指す素材を見つける方法の一つが、Facebookのようなソーシャルメディアである。シドは自分でもRugby Dumpやrugbymag.com、或いはSerevi Rugbyその他のサイトをチェックするが、他方でFacebookのグループに投稿されたリンクを辿って、それ以外の記事情報に行き着く場合もある。実際、Facebookなら能動的に探す努力をせずとも、ラグビーのニュースや記事を見つけられるだろうとシドは言う。

ソーシャルメディアは、他者に対して試合の広報を行う目的でも利用されている。チームのスカウトであるマーティンは、スカウトの際のYouTubeやFacebook、或いはTwitterの重要性について語っていた。試合予定その他、入部に役立つ情報がFacebookやTwitterに投稿されているので、自分のチームがより公共の目に止まりやすくなるというのである。

ジュリアンは、ソーシャルメディアこそが人をラグビーへと運んで来ると見ている。ソーシャルメディアのプロフィール欄にラグビー情報を投稿すれば、より多くの友人たちが当該競技に触れることが出来る、と彼は言う。

彼はまた、自分の両親がジュリアンのラグビーに関する情報をどのように投稿していたか、そしてそれが「隣人たちをこの競技にどれだけ熱狂させることになったか」、さらには近隣に住むより多くの若者たちが競技への関心を高め、自らプレーするようになったことまで語ってくれた。人はFacebookを1日に何度も見ているのだから、ラグビーにより多くの関心を持って貰うにはそれも一つの方法だとジュリアンは言う。彼や彼のチームメイトが投稿する記事を1日に何度か見ることで、多くの人がやって来て、試合や練習の時にチームを支援してくれるようになったのである。

ソーシャルメディアはまた、人がラグビーを

理解して行く時にも有効だとマイケルは思っている。彼によれば、殆どの人は自分の Facebook や Twitter にラグビーのリンクが張られていれば、自然にそれをクリックするものだというところを発見したという。「見ればそれが何なのか知りたくなるでしょ。ラグビーを知らない人がラグビーの短い動画を見て、これ格好良いねって話すのを何度も聞いたことがあるよ」。

インタビューした人の中には、他にもこんなことを語ってくれた人がある。チームへの関心を高め、ファンを増やすという点で、Facebook にラグビーの動画や記事を投稿するのは一つの方法だと。ある一つの学校チームのファンという以上に、ラグビーという競技そのもののファンをね、とも。

シドはメディアを何度も利用したことで、ラグビーへの関心が増したと信じている。彼の理屈は、「何かを知れば知るほど、益々それを調べてみたくなり、さらに関心が高まる」というものである。マイケルは主として YouTube でよくラグビーを見るようになったと感じており、ラグビーを始めた最初の数年に比べれば、試合に対する理解度が上がったという。彼は単に試合を見るだけでなく、指導用の動画も見えており、試合で用いるある種のスキルや知識を発展させる際には有効であるという。

マテューはメディアに関して、ラグビーでの成長をそれがどのように助勢してくれたかという点において異なる態度を有している。彼の大学は全米で放送されている大学ラグビー選手権に出場しており、その選手として、彼はメディアが自らを鼓舞してくれていると言う。おかげで、より激しく厳しい練習へと駆り立てられているというのだ。それは必ずしも試合に勝ちたいという欲求ゆえではなく、全米で放送されるからには、自分にはもっとやれることがあるはずだという理由による。自分のプレーする姿が全米に中継されるかもしれないという可能性は、グラウンドの内外で彼の練習に対する習慣を変えてしまった。

同じ文脈で、フレッドも DVD でプロのラグビーを見ることが、試合中の自分のプレーを変えたと言う。プロの試合を初めて見た時、「頭を

殴られたような気がした。自分がやるはずだったことについてプロの試合を見る前と後では考え方が違ってしまい、何と甘い考えだったか気付いた」のだと言う。

調査項目 2 は、インタビューに答えてくれた選手たちがラグビーを始めると決めた時に、メディアはどのような役割を果たしたかというものだった。回答を見る限り、伝統的なメディアは当該競技に新人選手を送り込むという点では、その役割は小さい。実際、メディアがそうした決定を少しでも後押ししたという事例は二つに止まる。

けれども、インタビューした選手たち全員が、一旦当該競技を始めた後にはメディアは重要な役割を果たしたのである。選手たちは自らのスキルを高めるため、また競技への意欲を高めるためにメディアを利用していた。彼らは、選手をスカウトするために、様々なタイプのメディアを利用してもいた。それゆえ、インタビューしたラグビー選手たちが当該競技を始めた時点ではメディアはさほど大きな役割を果たしてはいないものの、時を経て、米国にもラグビーの新世代たちが生まれている。彼らは、他者にラグビーを推奨する手段としてメディアの使い方をあれこれと試しているようだ。

確かに、メディアはこうした選手たちがラグビーをプレーするための決定要因としては殆ど認知されていないけれど、ソーシャルメディアが世帯に浸透し続けるに連れ、それは人々がラグビーをプレーし始めるよう仕向けるための大きな力となりつつある。

第五章：ディスカッション

本研究における当初の疑問は、米国人アスリートがより人気の高いスポーツではなくラグビーをプレーすることを選ぶのは何故かというものだった。インタビューで集めた全ての結果から判断すると、米国において他のより人気のあるスポーツではなく、ラグビーをプレーすることを選ぶ主要因は、YouTube や Facebook のようなソーシャルメディアで共有されるような情報も含め、他者とのコミュニケーションによ

るところが大きい。今回記録された事例の一つ一つを見ると、他者から招待を受けた、或いはまた友人や家族、その他の人から継続的にラグビーの話の聞かされた、さらにはインターネット上で入手出来る情報が増えて来た、などである。今回インタビューした選手たちは、こうしたことを通じてラグビーへの関心を持つこととなった。チームに入ったり、プレーを開始したりするには十分だろう。

第二の疑問は、選手たちがより人気の高いスポーツではなく、ラグビーをプレーしようと決めたことについて、メディアはどのような役割を果たしたかというものだった。今回インタビューした選手たちによれば、初期段階でメディアが果たした役割は大きくはないということだった。実際、ラグビーの新人選手を生み出すという点において、伝統的なメディアが果たした役割はごく最小限に止まる。

ただ、ラグビーを始めるかどうかの決定にメディアが関わった事例が二つ、三つあった。珍しい事例ではあるものの、少なくとも試合についてもっと学びたいという、より深みのある関心を惹起せしめたのは確かなようである。けれども現在の伝統的なメディアが、米国人を、身の回りにある他のスポーツではなくラグビー場へと向かわせるには、ごく小さな役割しか果たしていないのは明らかである。

皆が既に知っていたり、ファンであったりするようなスポーツから米国人を方向転換させ、別のよく知られていない競技へと導くには、社会レベルでの意思疎通が最も重要なようだ。おそらくそれは、メディアにおけるラグビーの存在感が、特に米式蹴球や野球、バスケットボールなどの他のスポーツ放送と比べてまだ小さいからだろう。

理由の如何を問わず、データが示しているのは、友人、家族、それ以外の他者との社会的な意思疎通（面と向かっての意思疎通、及びソーシャルメディアを通じた拡大版の意思疎通の両方）こそが、望ましい効果を発揮し得るということである。人をして新たな、外国生まれのスポーツを選択させるに十分なほどの効果を、という意味である。

先行研究¹⁰⁾のところで述べたように、対人コミュニケーションはそれが為されている現場の人たちに影響を与え、彼らを説得し、さらには人間関係にまで影響を及ぼすことが出来る。本調査では、友人や家族、その他の人たちとのコミュニケーションは、選手がラグビーをプレーし始めることに対して影響を与えることを同様に明らかにした。それだけではなく、実際、その影響に基づいて選手たちが行動するように説得さえするという点でも、対人コミュニケーションは重要である。

人間関係も、こうした対人コミュニケーションによって影響される。インタビューした選手たちは、チームメイトとの関係がいかに関重要だったか、何度も何度も口にした。特筆すべきは、チームメイトとの関係を描写するに際して彼らが用いた言葉であった。つまり、「兄弟」或いは「兄弟のような関係」といった言葉が何度も言及されたのである。

アスリート個人も、プロや大学のスポーツチームも、同じようにソーシャルメディアに注目して来た。彼らがプレーしているスポーツが、たとえ伝統的なメディアに統合されていても、だ。ソーシャルメディアが加わった理由は、情報を直接ファンに届けるためだ。毎日何百万もの人々がソーシャルメディアを利用し続け、ソーシャルメディアは彼らが情報を得るのに十分な時間を与えている。この場合の情報とは、ニュースリポート、スコア、チームの最新情報、画像、そして動画だろう (Bakalar, 2013)。

米国におけるラグビーの発展は、ソーシャルメディアの利用が増えていることに起因するのかもしれない。放送メディアがラグビーをそれほど扱わない一方で、ソーシャルメディアはラグビーのような新興スポーツが声を上げ、放送、或いは伝統的なメディアだけに頼っていたら不可能であったであろう数の世帯に入り込むための方策を提供して来たのである。

放送メディアは既に多様なスポーツで満杯状態だが、Facebook や YouTube のようなソーシャルメディアは、電波を独占している米式蹴球やバスケットボールのようなビッグスポーツと直接競い合うことなく、ラグビーを多くの世帯に

届けることが出来る。

インタビューでわかったように、彼らアスリートはソーシャルメディアこそ彼らの要求に最も相応しいプラットフォームだと考えている。Rugby Dump は彼らが何度も口にしたインターネットサイトの一つで、そこに行けば選手のコンタクトプレーや得点、その他ラグビーに関する短い動画が簡単に見られるという。

YouTube もアスリートたちにとって社会生活の重要な一部である。彼らにとって、トレーニングのための動画や試合のハイライト映像、はたまた現在行われている試合の生中継などを見つけることは重要だ。アスリートたるもの、スポーツの進化に遅れることは出来ないし、継続して体を鍛え、上手くなるよう練習することは欠かせないからだ。こうしたメディア市場は、ラグビーが米国文化の中で今以上の立場を確立するために必要なものである。

伝統的なメディアは、人々にラグビーを知らしめ、プレーさせるといふ点では大した触媒となっていないようだ。けれども、ソーシャルメディアにおけるラグビーは、人々が外に出て、ラグビーを継続的にプレーするようになる要因としては大きな存在であるようだ。

一旦この競技の虜になった人が次に向かう場所はインターネットである。自分が今プレーしているスポーツの、動画や記事を探すためだ。そうしたオンラインのニュース記事、論評、動画、ハイライト映像に触れることで、選手たちは自分がプレーしている新しいスポーツについて、より多くのことを知ることが出来るし、練習して上手くなろうとする気持ちもより強くなるのである。

忘れてならないのは、他者一とりわけ重要なのはチームメイトだが一との社会的な交流も、新人選手がプレーを続けて試合に出るようになるという点では同じ影響力を持つということである。これらの選手と同じチームにいる友人たちこそ、彼らが競技で成功を収める上で最も大きな要因なのである。

インタビューによれば、選手たちはチームメイトのことを、友達だけでなく「兄弟」とさえ呼び始めるようになるほど、両者は近い存在

となる。チームメイトを兄弟と呼ぶことで、お互いの絆が友情以上に強い何かであることがわかる。そうした絆こそが、選手として、またチームとして、彼らが何者であるかを規定するようになる。

つまるところ、ソーシャルメディアや対人コミュニケーションがラグビーをよく知らない人にラグビーをプレーするよう手助けしたのと同様に、伝統的なメディアはさほど大きな役割は果たさなかった。そのかわり、このメディアは選手たちがチームに留まり、継続的に練習し、自分が始めたスポーツのことを学ぼうとするための手助けとなった。

そして、選手たちが同じチームに留まることによって、チームメイト同士の友情は強まり、チームとしての一体感を高めるほどの絆となった。伝統的なメディアがラグビーという競技の発展に果たした役割は最小限に止まるが、ソーシャルメディアや他者との交流は、新たなスポーツ—今から学ぼうとする者にとっては外国生まれのものに見えるだろうけれど—を紹介するという初期の段階では死活的に重要である。

破壊的イノベーション

米国でラグビーが戦うつもりなら、声を上げるための新たな手段を活用する必要があるだろう。破壊的イノベーションの理論は、新規の顧客やユーザーのために創造された新たな考え方やイノベーションは、既に成功している企業を害する可能性があることを示唆している (Christensen, 1997)。初期の事例では、ろうそくの市場を破壊しようと台頭した電球の市場がある (Thomond & Lettice, 2002)。電球の登場と共に、ろうそくは突然利用価値がなくなり、その市場は消えた。Thomond & Lettice はさらに DVD 市場の破壊的イノベーションという、現代の潮流についても説明しており、市場への参入が効果的であったこと、またそれによって VHS の市場が時代遅れになったとも述べている。

ソーシャルメディアは、破壊的イノベーションの可能性を秘めて台頭した。それによって、ラグビーのごとくより小さな新興勢力が、既存の伝統的メディアを押しよけ、別な方法ではそ

んな余地がなかったかもしれない国で、成長し発展するための余地を見つけることが可能になったのだ。

いつでも好きな時に、ラグビーの動画や短い映像が簡単に見られる YouTube があることで、人々は自分の欲しい映像を伝統的なメディアが流してくれるのを待つことなく、欲しい時に欲しい映像を見つけることが出来る。

同様に、Facebook のようなソーシャルメディアがあることで、ユーザーはラグビー動画を個人のプロフィール欄にアップロードすることが可能となる。そうすると、そもそも検索さえしなかったであろう、より多くの人々が当該動画を目にすることも可能になるのである。破壊的イノベーション理論こそ、米国でラグビーが人気スポーツとして台頭するために必要なものかもしれない。

ラグビーの試合を増やす

本調査が示したように、米国において、ラグビーの試合を増やすことは可能である。仮に、ラグビー関係者が米国における競技の知名度を上げたいのなら、当該競技を説明、宣伝することに積極的になるはずである。伝統的なメディアが扱ってくれるのを待っていても、今よりずっと広汎な層へ訴求するにはかなりの時間がかかりそうだ。

そうすると、ラグビーの発展は選手個人やファン、さらには当該競技を広めるためのソーシャルメディアの利用増といったところにその責任がかかっているように見える。友人であれ、親であれ、スカウトしてくれたコーチであれ、本調査でインタビューした選手は一人残らず、そうした他者を通じてラグビーを始めている。メディアの助けを受けたという場合もあるにはあったが、もし友人からの励ましがなかったならば、メディアの影響を受けたというそうした選手たちも、ラグビー選手となる最初の一步を踏み出していたかどうか、断言することは難しい。

現状では、米国におけるラグビーは新興スポーツなのである。発展すればするほど、認知度は高まるだろうけれど。

若年層にラグビーを紹介することは、当該競

技が地域で発展することの助けとなり得る。今回のインタビューによれば、高校時代にラグビー経験のある者は、友人の話に触発されている。そして一旦ラグビーを始めた者は、自分もまた他の友人にラグビーチームにいることを開けっ広げに話すのだ。

若くしてラグビーを始めた選手たちは、この競技により献身的になる傾向があるようだ。大学でラグビーを始めた選手たちは、もちろんプレーすることを楽しんでいるし、競技に関係する新たな社会環境や交流すらも謳歌している。

けれども、より若い年代、例えば高校時代にラグビーを始めた者たちは、ラグビーの試合そのものへの愛情の深さという点でより献身的に見える。大学以前にラグビーを始めた彼らのような若者の場合、その主なきっかけは他者からこのスポーツのことを教わったり聞いたりしたことだ。彼らにとって、友人や家族によるラグビーの話は魅力的に思えたのだ。彼らはラグビーを始め、過去は決して振り返らなかった。

米国におけるラグビーが、より献身的なファンや選手に恵まれたスポーツになりたいのなら、選手たちはより若い時期にラグビーを始める必要があるように思う。メディアが扱ってくれるのを待つよりも、むしろ一人一人の個人がラグビーの広報係になって宣伝すれば、それは可能であろう。

大学チームの効果

多くの大学チームにとって、ラグビーはクラブでの競技である。それゆえ、大して広報もされないし、学内でさえ余り知られていない。広報活動に努めている大学ラグビーチームにとって、最重要の広報手段の一つは口コミらしい。

ラグビーの宣伝という点で、メディアの扱いは増えていると見られているものの、それは例えば全国規模での支持を増やすといった場合に限っての話だ。今よりも速いスピードでラグビーが発展するためには、その前にやるべきこと、つまり選手、コーチ、学生、一般大衆それぞれの間で、チームの認知度をより高めるための口コミがもっと増えなければいけないだろう。

選手のスカウトに関しても、大学チームは

もっと露出を増やさないといけないのではなかろうか。そして学内では、出来るだけ多くの学生に語りかけ、交流を深めることが必要だ。高校や町のスポーツクラブ、その他、若者が無数のスポーツに親しんでいる場所を訪問するのも、新たな若い才能をスカウトするには役立つかもしれない。

ラグビーを周知するには、選手もコーチもスカウトにより熱心にならなければならないだろう。メディアが新人選手を呼び込んで来るのを頼ってばかりでは、せいぜい一人か二人の新人が時折入ってくる程度が関の山かもしれない。外に出て自分の体を動かし、人と実際に接したり、ラグビーを語ったりする方が、間違いなくずっと早いだろう。催し物などの際にブースを設ければ、ファンに Facebook やチームのホームページを知らせることが出来る。そう Bakalar (2013) は示唆している。面と向かっての交流こそ、チームの広報に役立つということだ。

米国にプロラグビーを構築する

米国にプロのラグビーリーグを作るため、話し合いや活動が続いている (Dart, 2013; Hardy, 2014) が、可能な限り多くの協力者を巻き込むことが重要になるだろう。先行研究のところで触れた通り、放送による収入は競技の運営に欠かせないし、観客の有無によって、米国における新たなプロスポーツリーグの華々しい門出となるか、それとも終わりの始まりとなるかが決まって来るだろう。今のところどうにか持ち堪えているメジャー・リーグ・サッカーが出来る前、米国におけるサッカーは多くの失敗を繰り返して来た。

米国におけるプロのラグビーが成功するためには、それを支援する必要がある。ラグビー選手やファンからだけではなく、試合を一度も観たことがないという人からの支援も、だ。誰かがラグビーをプレーするよう決断させたのと同じく、誰かがラグビーの試合を観るよう、効果的な方法で手助けするのだ。おそらく、効果的な市場戦略とは、多くの人で混雑した場所から目に見える公開の場へ、ラグビー選手たちを連れ出すことだろう。そして、彼らがこの国で何

を始めようとしているのか、はっきりと見てもらおうことだろう。

本研究でわかったことは、あるスポーツの競技人口を増やすという点で、伝統的なメディアが出来ることは限られているということだ。おそらく、観客数を増やすという点においても同じであろう。

本研究でもう一つわかったことは、他者をしてラグビーをプレーせしめるためには、対人的な意思疎通が重要だということである。米国のラグビーがここまで発展した陰には、こうした面と向かった人的交流が重要な役割を果たしたのである。そしてそれこそが、米国のプロラグビー成功のための駆動点となることも大いにあり得るだろう。さらに言えば、ソーシャルメディアが仲介する意思疎通及びソーシャルメディアそれ自体が、新たなプロリーグ促進のための効果的な方法となるかもしれない。

第六章：結論

スポーツはずっと長い間、私たちの身の回りに存在していた。ただ、放送メディアがスポーツの領域に入り込むに連れ、暗闇に置いてきぼりになるスポーツが現れた。放送メディアはスポーツの成長を助けもしたが、同時にそれ以外のスポーツは無視しても来た。スポーツには (NFL のように) 地域性を伴うものもあるが、(その NFL が大英帝国の市場を刺激したように) 他の国々でファンの獲得に成功することもある。

先行研究のところで見たように、米国には人気のあるスポーツがたくさんある。もちろん、プロの米式蹴球、野球、バスケットボールチームは一杯あるから、選手を選ぶのには困らない。けれども、米国のラグビーに限っては、まだ成長過程にあることから、国内におけるプロスポーツとしての基盤には欠けている。

いずれにせよ、ラグビー選手は全米中に散らばって存在するし、多くの大学ラグビーチームが成功を収めている。これらの選手たちはある時どこかで (明確にはわからないものの) ラグビーをやろうと決断したはずである。本研究では、彼らがラグビーに関心を持ち、やがてそれ

をプレーするに至った理由を調べた。

ラグビーを選んだ者たちの出身地は全米の至るところであり、従ってそれぞれ異なる生活背景を持つ。しかしそれでも、ラグビーをプレーしようと思ったことについては、似たような話を全員が共有していた。プレーし始める前でさえ、友人や家族は彼らにラグビーの話をし、そうした意思疎通を基礎に選手たちは競技への関心を高めて行ったのだ。

関心が大きくなると、人はラグビーという競技に引き込まれる。そしてついには、それをプレーするようになるのだ。他者との社会的交流は、新人アスリートをラグビーというスポーツへと誘い、参加を動機づけるための鍵となる要因として台頭して来ている。他者との対話がなければ、米国におけるラグビーの成長は全く停滞していたかもしれない。米国におけるこの未開拓な競技に興味を持たせるには、対話こそが重要なのである。

米国のメディアにおいてラグビーは台頭するスポーツのように見えるものの、伝統的なメディアにはまだやるべきことが残っている。新人選手にラグビーへの関心を持たせ、実際に競技を始めるような動機を与えること、そのための効果的な努力である。とは言え、メディアはラグビーを始めようと思った選手に、そのプレーを継続させることに対しては役割を果たしている。メディアのラグビー情報に触れることで、選手たちは単にプレーするだけでなく、改善し、成長し、強くなろうとするのだから。メディアを利用して、選手としての役割をより良く理解したり、実際の試合がどのように行われるか見ようとしたりすることは、既にラグビー選手となった者が成長するための重要な部分である。

チームメイトとの社会的交流も、新人ラグビー選手を競技に留まらせるための大きな要因である。チームメイトとの関係は、一緒にプレー、練習するに連れ成長し強くなる。そしてついには、選手たちが兄弟のような関係と呼ぶ、友情よりも強固な絆となるのだ。

インタビューした選手たちの大半は、こうした関係が鍵となって、ラグビーをプレーし続け

るための手助けとなったと言う。ラグビーはスポーツ以上の存在なのである。こうした選手たちにとって、ラグビーはライフスタイル、社会環境であり、友人やチームメイトに対してだけでなく、自分自身にも自らの価値を証明出来る場所でもあるのだ。

ラグビーは米国において台頭しつつあるスポーツであり、その勢いを継続し、ましてや成長のスピードを早めようとするのなら、より多くのことが為されなければならない。もちろん、個人の努力よりメディアの方がもっと多くの対象者に届くだろう。けれど、メディアの持つそうした能力とは裏腹に、その影響力に関しては、ラグビーと個人的な関係を持つこと以上のものではない。米国に新たなプロラグビーリーグが発足するという。新リーグが成功するには、人と人を繋げていくこうした個人の力が大事な要因となることを証明出来るのではなからうか。大学や高校のラグビーチームの場合、競技を周知するための最も効果的な方法は、ずっと人対人の直接的な関係だったのだから。

限界と今後の研究

本研究は米大陸各地のラグビー選手を対象としたため、実際に各選手と会って意思疎通を図ることは不可能であった。面と向かってインタビューするかわりに、会話は電話で行うこととなった。電話のみを意思疎通の手段として使ったことで、調査者は会話中、ある種の非言語コミュニケーションで示されたものを捉えることが出来なかった。この点は将来の研究によって是正されるだろう。つまり、遠くにいる調査者に電話するというよりは、じっくり座って直接話しますよ、という地域のグループを探すことだ。

さらに言えば、チームによってコーチとの連絡がうまくいかなかったことも本研究が有する限界の一つであった。コーチたちは概して協力的で、研究に支障はなかったものの、時間通りに意思疎通が出来なかったり、連絡さえして来なかったりしたコーチも数人いた。

繰り返しになるが、この点は地域のラグビーチームを選び、コーチを個人的に訪問すれば解決出来る。その際、コーチには研究の内容や重

要性をきちんと理解しておいて貰わねばならない。こうした過程をより効率的にするもう一つの方法は、全米ラグビー協会もしくは、米国におけるラグビーの発展を企図するより高次の組織に、研究プロジェクトの後援者になってもらい、その支持を受けることだ。

本研究に関係する近接領域の研究が行われるかもしれない。例えば、メディアによる扱いの多寡によって、人々のラグビーに対する捉え方がどのように変わったかということについて、その全容を解明するためにさらに突っ込んだ調査を行うことも可能であろう。

また、他のスポーツについて本研究のような試みを繰り返すことも可能であろう。米国におけるファン層が盤石とは言えないラグビーのようなスポーツではなく、例えば米式蹴球やバスケットボールのような、より人口に膾炙したスポーツを人がプレーし始めるに当たって、メディアが果たした役割は果たして大きいのか小さいのかを調べるのである。

或いはメディアによるラグビーの扱いがより大きなどこか他国で、本研究のような試みが繰り返されることもあるだろう。スポーツの発展を促したり、スポーツファンや選手の関心を高めたりする役割を、果たしてメディアが担っているのかどうかを明らかにするのだ。

今後の研究は、一定数の人々が使うソーシャルメディアとそこに登場するラグビーにより焦点を当てても良いかもしれない。そしてその結果を土台に、ソーシャルメディアの発展がラグビーの発展にどう関わっているかをさらに調べるのだ。

さらに、本研究を次の段階に引き上げることも可能であろう。大学のラグビー選手にインタビューするのではなく、ラグビー米国代表チームの選手に声をかけ、彼らがどのようにラグビーやソーシャルメディアに接して来たかを調べるのだ。

引用文献

Bakalar, A. (2013). *Public relations: The use of social media as a tool for*

increasing awareness about college club sports teams. (Senior project, California Polytechnic State University, San Luis Obispo, California). Retrieved from <http://digitalcommons.calpoly.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1059&context=jouresp>.

Christensen, C. (1997). *The Innovator's Dilemma: When New Technologies Cause Great Firms to Fail*, Boston Massachusetts, USA: Harvard Business School Press.

Dart, T. (2013, May 11). NFL knows US professional rugby union could be a very good deal indeed. Retrieved from <http://www.guardian.co.uk/sport/2013/may/11/us-rugby-union-professional-league-nfl>
ESPNScrum.com. (2013, November 15). All Blacks' 'most successful team in world sport.' Retrieved from <http://www.espnscrum.com/england/rugby/story/206093.html>.

Hardy, T. (2014, March 25). NFRL combine ready to roll. Retrieved April 16, 2014 from <http://rugbyamerica.net/?p=3738>.

Thomond, P., & Lettice, F. (2002, July). Disruptive innovation explored. In *Cranfield University, Cranfield, England. Presented at: 9th IPSE International Conference on Concurrent Engineering: Research and Application (CE2002)*.

ⁱ 訳者注 本稿は 2019 年 3 月に発表した前編同様、著者ベンジャミン・ジェイムズ・コッカーが 2014 年、米ブリガム・ヤング大学に提出した論文を、著者本人及び大学当局のご厚意及び許可を得て、大西が翻訳したものである。但し、紙幅の都合により原著の Acknowledgements 及び目次は省略している。他方、原著には繰り返しの表現が多く、本稿は原著を尊重し、一切省略することなくそのまま掲載している。

ⁱⁱ 訳者注 プレーが細切れになる米式蹴球との対比であろう

- iii 訳者注 海軍または空軍大学
- iv 訳者注 全米三大ネットワークの一つ
- v 訳者注 米国のスポーツ専門チャンネル
- vi 訳者注 2014 年
- vii 訳者注 現在の World Rugby (WR)
- viii 訳者注 本稿前編の第二章

